

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	〈病い〉を読みかえる : 寺山修司「身毒丸」の生成とアダプテーションに注目して
Author(s)	矢吹, 文乃
Citation	表現技術研究 , 16 : 97 - 108
Issue Date	2021-03-31
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/50854">10.15027/50854</a>
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050854">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050854</a>
Right	
Relation	



## 〈病い〉を読みかえる

### ―寺山修司「身毒丸」の生成とアダプテーションに注目して―

矢吹 文乃

#### はじめに

あるテキストが咀嚼されて読みかえられ、別のテキストへ作りかえられることをアダプテーション（翻案）と呼ぶ。アダプテーションの理論が着目しているのは、変化し続ける環境に対してテキストがいかに適応するかということである。翻案した―翻案されたテキストの関係を眺めると、テキストを取り巻いていた環境、つまり、メディア／ジャンルの性質や同時代の社会・文化状況を炙り出すことができる。また、この作りかえのプロセスは新たに誕生したテキストのほうから見ればテキストの生成のこともある。あるテキストが先行テキストからなにを受け継ぎなにを捨象したかを検討することで、なぜ先行テキストを作り変えようと思ったのかという作家の創作意図を探れるのみならず、受け継ぎ損ねた要素／捨象しきれなかった要素を拾い集めて新たな視点の読解を提示することも可能になる。こうした生成／アダプテーション研究の観点は、先行する小説や演劇のタイトル／登場人物／設定へのパロディ／オマージュを多分に含む寺山修司（一九三五―一九八三年）の演劇作品を研究する際に欠かせない。

以上のような姿勢で寺山の演劇作品に向きあったとき、「説教節の主題による見世物オペラ 身毒丸」（寺山修司『身毒丸』新書館、一九八〇年三月）はユニークな生成とアダプテーションの経過をたどった作品だと言える。「身毒丸」は説経「しんとく丸」（しを主な材に採り、タイトルには折口信夫の小説「身毒丸」（『みづほ』八、一九一七年六月）から「身毒」の当て字を借りた作品である。「演劇実験室◎天井桟敷」による初演（演出：寺山修司／J・A・シーザー、一九七八年六月二十二日～二十六日、於：新宿紀伊国屋ホール）以降、同作品はとくに顧みられてこなかったが、寺山没後の一九九五年に岸田理生（一九四六―二〇〇三年）が執筆したリライト版「身毒丸」（岸田理生『岸田理生戯曲集「身毒丸」「草迷宮」』劇書房、一九九七年四月）が蜷川幸雄の演出によって複数回上演されたことで再び脚光を浴びるようになった。要するに、「身毒丸」は説経等の先行テキストの要素を取り込んで成立し、オリジナル版とリライト版という二つのバージョンを有しており、リライト版のほうがオリジナル版よりも一般的な知名度が高いという珍しいテキストなのである。

そこで本稿では、「身毒丸」の生成とアダプテーションに注目してこ

の作品を評価してみたい。そのために、まずは「身毒丸」の生成を確  
認し、「身毒丸」が先行テキストを咀嚼してどのようなテーマを抽出し  
たかを確かめる。次に、「身毒丸」がオリジナル版からリライト版へと  
展開してゆく中で作品の重要なモチーフの一つである〈病い〉の表象  
が時代の要請に応じて書きかえられたことを指摘する。その上で、〈病  
い〉表象作品としての「身毒丸」の意義を問う。

## 一 〈家〉と差別を撃つ〈病い〉

オリジナル版「身毒丸」は、母を売る店から買われてきた継母（撫  
子）と継子（しんとく）の愛憎を描いた物語である。十六歳の青年・  
しんとくは美しい撫子を邪険に扱い、撫子も嫡子のしんとくを疎まし  
がる。撫子は連れ子のせんさくに家督を継がせるためにしんとくを呪  
い殺そうと画策する。呪われたしんとくは盲目になって、「癩病」にも  
罹り家を追われる。一年後、復讐のために戻ってきたしんとくは家督  
を継いだせんさくを殺す。家督を継ぐ者がいなくなり崩壊した家のな  
かでしんとくと撫子は和解する。物語は最後、鬼子母神となった撫子  
がしんとくを食べることによって幕をおろす。

そもそも、オリジナル版「身毒丸」は寺山修司と岸田理生の共同台  
本であった<sup>②</sup>。同作品を岸田がリライトしたきっかけは劇書房の設立  
者・笹部博司の依頼による。当時、笹部はホリプロの関係者等ととも  
に「新しい「身毒丸」」の上演を企画しており、そのための作家とし  
てオリジナル版の共同著者であった岸田に声をかけた。

依頼を受けた岸田は《新しい『身毒丸』を恋物語にしたい》<sup>③</sup>と思  
ったという。

寺山さんの「作品ノート」から、私が引き算したのは、母神子  
神の神性でした。

〈母〉という役割から、女になってゆく〈女〉。〈子〉という役  
割から、男になってゆく〈少年〉という〈人間〉を書きたいと思  
ったのが、新しい『身毒丸』発生の動機だったからです。

そして、そんな中で、社会という集団は必要がないと思い、天  
井敷敷版『身毒丸』に色濃くあつた社会的祭犠性は、姿を消して  
います。

継母と継子の関係から、唯の男と女に〈成ってゆく〉二人の内  
側を細かく、叮嚀に書いてゆくこと。それが私の『身毒丸』だっ  
たのです<sup>④</sup>。

岸田はオリジナル版「身毒丸」から《母神子神の神性》を捨象し、  
しんとくと撫子という人物にフォーカスして《人間》の《内側を細か  
く、叮嚀に》描こうと試みた。

リライト版の改変点は非常に多い。大きく言えば、リライト版は、  
オリジナル版から恋物語のシンプルなストーリーのみを抽出し、オリ  
ジナル版に特徴的だった〈国家〉や〈病い〉をテーマにしたコラージ  
ュ的な挿話をほぼすべて削除している。とくに注目すべきなのは、結  
末部が書きかえられたことである。撫子がしんとくを食い殺すという  
オリジナル版の結末は、リライト版では撫子としんとくの恋愛成就に

変更された。この改変点も《社会的祭儀性》を捨象し《人間》を強調するリライト版の創作方針により生じたものと思われるが、結果的に「身毒丸」の原典である説経「しんとく丸」の結末（しんとく丸と乙姫が結ばれる）が復活している点が面白い。オリジナル版執筆時に寺山がつけ足した要素を削除したことで、原典の形に戻った部分もあるということだ。

ただし、リライト版のエンターテインメント性を押し出した改変には批判も多い。例えば、寺山修司の研究者である守安敏久は《岸田理生の脚本はやや通俗的に物語化されていた》<sup>(5)</sup>と難色を示している。しかし、オリジナル版「身毒丸」が一九七八年の初演以降長らく再演されなかった時期に、リライト版はキャストを変えるなどして五度も上演され、海外公演まで果たしたという事実は重く受け止めなければならぬ。恋物語というキャッチーなラッピングは一般の観客への目配せとして充分機能し、見事、一九七〇年代に誕生したアングラ演劇である「身毒丸」は一九九〇年代後半〜二〇〇〇年代の時勢に適応したのである。

さて、ここまでオリジナル版とリライト版の「身毒丸」を紹介し、簡単に比較してきた。ここで元々に立ち返り、オリジナル版「身毒丸」がどのようにして成立したかを、先行研究を参照しながら確認したい。「身毒丸」の先行研究はオリジナル版の分析に偏っている。中でも、しんとくと撫子のショッキングな近親相姦のシーンに注目して考察した研究が多い<sup>(6)</sup>。そのほか、海外演劇の先行テキストと「身毒丸」を比較した論稿として、清水義和「E・オニール作『喪服の似合うエレクトラ』とJ・ジロドゥ作『エレクトラ』と寺山修司作『身毒丸』

の母子関係」(『愛知学院大学語研紀要』三十三、二〇〇八年一月)がある。清水の論は「身毒丸」が成立過程で『エレクトラ』のテキストを吸収していることを証明したと言うよりかは、「身毒丸」には海外演劇にも共鳴する主題が含まれていることを明らかにしたと評価すべきものだと言者は考えている<sup>(7)</sup>。

先行テキストがオリジナル版「身毒丸」の成立に与えた影響を分析した論稿として最初期のものと見られるのは、岸めぐみ「寺山修司「身毒丸」の説話的構造——しんとく丸劇の系譜——」(『目白近代文学』六、一九八五年十月)である。岸によると「身毒丸」の成立に最も強く影響したのは説経「しんとく丸」であり、ほかにも説経「あいごの若」や浄瑠璃「摂州合邦辻」が影響を与えているという。説経「しんとく丸」は「身毒丸」同様、主人公（しんとく丸）が継母の呪詛を受けて盲目になり癩病にも罹って家を追われるという筋書きを有している。しかし、説経の結末はしんとく丸が病気を治して家へ戻るという大団円であるのに対し、「身毒丸」のラストでは壮絶な近親相姦と人肉食が描かれる。岸はこの改変の理由を二作品の《母神と子神の役割の違い》に求めて読解を展開している。これに対して本稿では、寺山が「身毒丸」の作品ノートで《家族の三角形の因果構造を、解体する試み》<sup>(8)</sup>だったと述べていることを鑑みて、この改変は《家》へ回帰したしんとく丸と《家》を崩壊させたしんとくの対比を前景化するためにおこなわれたものだとして単純に捉えても差し支えないと判断した。重要なのは、寺山が古典のテキストから近代的な《家》の問題を読み取って新たな作品に生まれ変わらせたという点である。

劉夢如「寺山修司共作戯曲「身毒丸」論——コラージュとしての見

世物——』、『阪神近代文学研究』十八、二〇一七年五月）は岸の論稿をふまえて、「身毒丸」の台詞に説経のテクストがそのまま取り込まれている点に注目し、コラージュ技法の観点から「身毒丸」と先行テクストの関係を論じている。劉は「身毒丸」を『昔話の継子譚や英雄流離譚から得た母子相姦や流離のモチーフ』によって『家の問題と差別の問題』を提示している作品であると捉えて、『原作の秩序から細部を離脱させ、それらの再構成を通して新しい秩序を組み立て』てゆくコラージュの技法が『家制度に代表される日常の秩序を乱す』／『日常において黙許される差別の問題を告発する』といった「身毒丸」のテーマに説得力をもたらしていると結論づけている。劉の分析は、「身毒丸」が〈家〉と差別という二つの問題に対する意識を柱にして成立したと指摘するだけでなく、それらの問題を黙認してきた構造を告発・攪乱する力を持った作品である可能性まで示唆してきて新しい。

では、「身毒丸」はどのようにして〈家〉と差別の問題を描出しているのか。それは、しんとくの〈病い〉を通してである。しんとくが癩病に罹って家を追われる／差別を受けるという設定が「身毒丸」のテーマには大きく関わっている。

寺山が〈病い〉の表象にこだわって「身毒丸」を執筆したということとは「身毒丸」の作品ノートの記述を読めばはっきりと見えてくる。作品ノートで寺山は折口の小説「身毒丸」にふれながら、『業病の因果には、「俊徳」よりも、やはり「神徳」よりも、やはり「身毒」が一ばんふさわしいように思われる』<sup>9)</sup>と、説経から連綿と続く「しんとく」という登場人物の命名について述べている。このことから、寺山が自身の作品のタイトルに「身毒」の字を採用した背景には「毒」＝〈病

い〉の表象にフォーカスする意図があったことがうかがわれる。

説経「しんとく丸」が幾度もアダプテーションを重ねてゆく過程で主人公の名前が「しんとく丸」から「身毒丸」に改変されたことは、この物語の受容の変遷を表しているかのようである。もとは「とく（徳）」の側面を強調されていたしんとく丸が翻案を経るうちに身に被った「毒」とはなになったのか。そこで、次節ではこの「毒」の意味に注目し、説経「しんとく丸」をはじめとする先行テクストと対置しながら、オリジナル版／リライト版「身毒丸」をより深く比較・分析してみたい。

## 二 「毒」の意味

「身毒」の字を最初に用いた折口の小説「身毒丸」において、「毒」とは『先祖から持ち伝へた病気』のことである<sup>10)</sup>。『蝦蟇の肌のやうな、斑点が、膨れた皮膚に隙間なく現れ』<sup>11)</sup>るといふ症状は寺山の「身毒丸」にも登場する癩病のそれを思わせるが、作中では具体的な病名は示されない。描かれているのは抽象的な〈病い〉のイメージだ。

ここで、「俊徳丸伝説」<sup>12)</sup>を祖とする諸テクストにおける〈病い〉の表象に目をやると、これらのテクストで描かれる疾患には「癩病&盲目」「癩病のみ」「盲目のみ」の三パターンがあることがわかる【表】参照）。癩病と盲目以外の疾患が描かれることはない。

興味深いのは、戯曲「身毒丸」がオリジナル版からリライト版へ移る際に、描く〈病い〉の種類を変更している点である。寺山が「身毒

【表】「俊徳丸伝説」派生作品の〈病い〉の表象

	癩病	盲目
説経「しんとく丸」	○	○
説経「あいごの若」	×	×
謡曲「弱法師」	×	○
浄瑠璃「撰州合邦辻」	○	○
折口信夫「身毒丸」	○ (?)	×
三島由紀夫「弱法師」	×	○
オリジナル版「身毒丸」	○	○
リライト版「身毒丸」	×	○

丸」執筆にあたり〈病い〉にこだわっていたのは先述のとおりであるが、岸田はこの点をわざわざ変更した。オリジナル版が説経「しんとく丸」の設定に忠実であることや、同じく翻案である三島由紀夫の戯曲「弱法師」(『聲』一九六〇年七月)が謡曲「弱法師」の設定を受け継いでいることを見てもリライト版の変更は目立つ。

変更の理由として考えられるのは、リライト版が執筆された時期のハンセン病を取り巻く社会状況の変化である。山本俊一『増補 日本らい史』(東京大学出版会、一九九七年十二月)にまとめられている「らい予防法」廃止の歴史を参照しておこう。

リライト版が書かれた前年にあたる一九九四年の十一月八日、全国国立ハンセン病療養所所長連盟が長崎市で総会を開いた。そこではらい予防法廃止を要請する見解がまとめられ、ハンセン病患者の「強制隔離収容を必要とする理由はない」と指摘した上で、同法が「ハンセン

病患者に対するいわれなき差別と偏見を醸成した」と批判し、一方で高齢化した患者の治療や福祉を保障する新法を、らい予防法廃止と同時に制定することを望んだ<sup>(13)</sup>。リライト版の初演(於…彩の国さいたま芸術劇場)があった一九九五年十二月一日〜四日の一ヶ月後の一月二十四日には、全患協臨時支部長会議が九項目の「基本要求と宣言」を発表した。その後、一九九六年四月一日に「らい予防法」は廃止される。まさにハンセン病に対する認識の大きな転換の只中でリライト版は執筆・上演されたと言えよう。リライト版がオリジナル版に含まれていた癩病患者への差別的な表現と向きあうことになった背景にはこうした状況があったのだと推察される。

基本的にリライト版は、オリジナル版にあった癩病に言及する台詞をその前後の台詞(ときにはそのシーン)もろとも削除することでこの問題に対処している。語句を「癩病」から「盲目」関連の語彙へ置きかえることで対処しているのは三ヶ所のみである。一つ目は、『癩病やんで家を捨て』を『両眼怪我して家を捨て』としている部分。二つ目は、『癩病やみのしんとくは』を『まなこつづれたしんとくは』としている部分。三つ目は、しんとくがせんさくを襲うシーンである。三つ目のシーンはオリジナル版において最もあからさまに癩病への偏見が表れている箇所であるにもかかわらず、リライト版では削除を免れ語句の変更のみにとどまった。その上、先の二例とは異なった方針の修正が加えられている。どのように修正されたか詳しくみてゆく。まず、オリジナル版の描写は次のようになっていた。

せんさく (ハツとして) あ、おまえは!

まま母<sup>マ</sup> そうさ、あたしはおまえの兄のしんとくだよ。おまえの母親に呪われて癩病に患り、こうして皮膚もまだらに溶けかかる。顔はにんげん、体は畜生、夜になりやあ、純情可憐の鱗が光るんだ！

(中略)

せんさく 来るな、癩病がうつる。

しんとく そう、兄弟はひとつだ。おまえにも同じように癩病のたのしみを頒けてあげるのさ。(と、せんさくの学生服もズボンもすっきり脱がせてしまう。全裸にされたせんさくを、ひしと抱きよせて、いきなり) 死ねーッ！

と、突きとばす(14)。

リライト版はこれを次のように書きかえている。

せんさく (ハツとして) あ、おまえは！

身毒丸 そうさ、俺はおまえの兄の身毒だ。おまえの母親に呪われて、まなこつぶれた身毒だ。

(中略)

せんさく 来るな、不潔がうつる。

身毒丸 そう、兄弟はひとつだ。おまえにも同じように不潔のたのしみを頒けてやるのさ。

(と、せんさくの学生服もズボンもすっきり脱がせてしまう。全裸にされたせんさくを、ひしと抱きよせて、いきなり)

死ねーッ！

(と、突き飛ばす。(中略) 飛び出してくる小間使いと仮面売り。)

小間使い 身毒が狂った！

(絶叫する。)(15)

《癩病がうつる》が《不潔がうつる》に書きかえられ、それに伴って《癩病のたのしみ》も《不潔のたのしみ》へと置きかわっていることがわかる。「穢れ」という曖昧なイメージだけを残して具体的な病名を伏せるという一見無邪気なこの改変は、しかし「身毒丸」における「毒」＝《病い》の解釈を拡大させるものである。なぜならリライト版は、台詞は変えても、しんとくがせんさくを裸にして抱きよせるという行為は変えていないからだ。《病い》をうつすために肌をあわせたという読みができなくなるリライト版においてなおしんとくが裸のせんさくを抱くとき、《不潔》の意味は「同性愛」に読みかわる。

実際にリライト版「身毒丸」の上演では、このシーンでしんとくがせんさくにする行為がセックスであることを観客に想像させるような演出がつけられている【図1】【図2】参照(16)。リライト版上演のしんとくは、ピアノを用いた蠱惑的な音楽をBGMにしてせんさくの首筋に口づけ、脚を舐める。オリジナル版上演の同シーンでもしんとくは服をただけてせんさくに跨るなどするが、こちらはギターを激しくかき鳴らすロック音楽にのせたダンスの振付の延長という印象のほうが強い。《癩病》という語が《不潔》へ置き換えられたことよってこのシーンに内在していた「同性愛的」な意味が強調された(あるいは「癩病的」な意味が捨象された)結果、演出に変化が生じたのである。



【図1】 せんさくの首筋に口づけるしんとく



【図2】 せんさくの脚を舐めるしんとく

### 三 ハンセン病とHIV／エイズ

しかし、それなら『不潔がうつる』という台詞を「同性愛がうつる」と書き直しても意味が通じると問われると、それは違和感があると言わざるをえない。セクシュアリティは伝染病ではないからだ。だが、同性愛と〈病い〉が結びつけて語られていた時代は存在した。黒岩裕市『ゲイの可視化を読む 現代文学に描かれる〈性の多様性〉?』（晃洋出版、二〇一六年十月）は、一九八〇年代のエイズ危機を取りあげて、当時男性同性愛が『あからさまなまでに「不治の伝染病」と結び

つけられ』(17)、『男性同性愛』や「男性両性愛」というセクシュアリティ、「男性同性愛者」や「男性両性愛者」という人物が病理化され、あたかも「伝染病」の感染源、ウイルスそのものであるかのように語られてい』(18)た状況があったと述べている。

ここで、リライト版執筆当時のエイズ観をより詳しく知るために、大谷藤郎『現代のステイグマ ハンセン病・精神病・エイズ・難病の艱難』（勁草書房、一九九三年四月）の記述を引用する。

エイズが社会的問題になるにつれ、私は五〇年前の第二次世界大戦中の京都大学付属病院の古めかしい木造皮膚泌尿器科病棟の奥の一角に設けられていた京大皮膚科特別研究室を思い出している。そこではハンセン病の入院患者さん一五人と外来一〇人くらいに対して医師は小笠原登助教授ただ一人、看護婦さんも戸田さんという方一人、賄一人、後は小笠原先生のお姉さんが本場のボランティアで薬局調剤を手伝っていただけ。人手不足、予算不足で、塀の中の道路のような狭い庭を、患者さん方が他人目をおそれて顔をかくして小走りで行入りしておられた。

（中略）

学生ボランティアの私の目に映った戦時下の暗い風景と、今、経済大国として胸を張っている日本の中のエイズ病室の姿とが、私には同じようにダブって見えてくる。いずれも一握りの現場の人に困難な責任が押しつけられ葛藤が起っているが、為政者をはじめ社会の大半の人々に、少数者の患者さんの悲鳴と現場の難しさが聞こえているかどうかである(19)。

大谷は、ハンセン病とエイズという異なる疾患を、社会が〈病い〉に対して無理解であるという点で重ねて眺めている。先の黒岩の言説と併せれば、一九九〇年代半ばの社会においては、同性愛者もハンセン病患者同様〈病い〉を理由に偏見に晒され、迫害されていたと言えるだろう。癩病からHIV／エイズを連想し、同性愛行為へと結びつける発想の飛躍は、リライト版執筆当時決して突飛なものではなかったのである。

だが、創作という文脈の上では、こういう飛躍が可能だということ は慎重に示されなければならない。そのことは、木村功が『病の言語表象』（和泉書院、二〇一六年三月）において瀬戸内寂聴の「愛死」に対して展開した批判的な分析を読めばわかる。

「愛死」は一九九三年十一月四日から一九九四年九月五日にかけて『読売新聞』で連載された小説で、エイズを題材に採っている。木村は「愛死」のなかでエイズが《業病》と呼ばれている点を取りあげて次のように批判している。

〈神仏からの罰〉・〈因果〉・〈業病〉という彰子の言葉からは、エイズがセックスを介した〈性Ⅱ交通の病い〉ではなく、神仏のような彼岸の絶対者から不倫という〈悪行〉や前世の因果に対して与えられる処罰、言い換えれば倫理の病として捉えられていることが分かる。(中略)

しかもこの仏教的イデオロギーの導入は、〈業病〉〈隔離〉という言葉を介してハンセン病に接続していくことで、エイズにハン

セン病とその患者が負わされてきた苦衷に満ちた歴史的表象を継承させてしまうことになる。ハンセン病と同一視されたエイズは、〈業病〉〈隔離〉、そして〈巡礼の旅〉といった古来の差別的表象の下に抑圧されることで、聖化・ロマン化に加えて歴史的悲劇性をも獲得するのである。このことよって性感染症であるエイズを、エイズプロパーとして「いま・ここ」において認識することが著しく困難となる。それはHIV／エイズという病と対峙するための現実的認識を著しく阻害することを意味している(20)。

木村の批判は、まず、エイズが《業病》と呼ばれることで、倫理に背いた者に与えられる罰という歪んだ意味あいを持たされる点へ向けられている。さらに、木村は《業病》という語が古来よりハンセン病の呼称として用いられていたことにもふれ、エイズとハンセン病という異なる疾患が《業病》という語を介して無批判に接続されることに対して警鐘を鳴らしている。なぜなら、エイズにハンセン病の歴史が重ねられると、目の前にあるHIV／エイズ患者を取り巻く差別の状況へいたずらに象徴化されたイメージが付帯され、様々な議論の論点がぼやけてしまう危険性があるからである。

こうした批判はオリジナル版／リライト版「身毒丸」のテキストにも当てはまる。オリジナル版は癩病を呪いの結果として描くことよって、〈病い〉の発症の根源に《神仏のような彼岸の絶対者》の存在を匂わせてしまった。また、〈家〉の構造のなかでうまく立ち回れなかったしんとくが〈病い〉を患って追放されるという設定も「しんとくは意地を張らずに継母と仲良くしていればそんな目には遭わなかった」

## まとめ

というような転倒した因果関係を読者・観客に刷り込む危険性を孕んでいる。現実のハンセン病患者たちは、〈家〉の構造から逸脱した《罰》として〈病い〉を患ったのではない。〈病い〉を理由に追放された結果、〈家〉の構造に組み込まれるという選択肢すら選べなかったのだ。

ライト版は、説経「しんとく丸」から続くハンセン病に対する差別意識を改めた。その点では一定の評価をせねばなるまい。だが、その改変はオリジナル版に潜在していた同性愛的要素を色濃くすることによってなされており、他方で深刻なホモフォビアを誘発している。《不潔がうつる》という台詞に内面化された、同性愛を《不潔》な〈病い〉の《感染源》と捉える発想は強烈な差別意識に支えられている。ライト版で書き足された《身毒が狂った!》という台詞も、ホモフォビアに裏打ちされたものと見てよいだろう。この台詞はせんさくを弄び狂い踊るしんとくへ向けられたものであるが、その嫌悪は《狂い踊る》ことよりもせんさくを《弄ぶ》ことへ向かっている（ライト版にはほかにも狂い踊るシーンがあるが、前後にその狂気を強調する台詞はない）。

加えて、ハンセン病の表象を一九九〇年代の社会状況において同性愛行為の表象へ移したライト版の発想の飛躍は、当時まだ感染経路も発症原因も不透明だったHIV／エイズへの偏見を助長しかねなかった。ハンセン病の歴史に学び悲劇を繰り返さないように奮闘していたエイズ当事者や医療関係者の活動に対しても、あまりにも無頓着な読みかえであった。

説経等の先行テキストから〈家〉や差別の問題を抽出して〈病い〉の表象に注目したオリジナル版「身毒丸」と、時代の要請に応じて描く〈病い〉を変えたライト版「身毒丸」。これらの作品は、「身毒丸」の「毒」の字にそれぞれの時代で差別を受ける〈病い〉を代入することで成立し、しんとくがせんさくを襲うシーンでは〈病い〉に対する社会の厭悪をむきだしにする。

ライト版は〈病い〉を読みかえて差別的表現を回避しようとしたにもかかわらず、書きかえという行為のみが達成され、差別的表現を回避するという目的は失敗に終わってしまった。これは、単純にエイズとハンセン病を結びつけた「愛死」の場合ともやや異なっている。ある差別には高い感度を発揮できるテキストが別の差別には容易に与ってしまう。こうした事態にこそ、〈病い〉を取り巻く差別の歴史の核となるものが秘められているのではないだろうか。

以下は、一九九〇年十二月、自由人権協会の研究会でエイズ対策の今後が論じられた際に出た、エイズ患者とハンセン病患者に対する差別の《違った面》への言及である。

エイズの場合の差別は、性病、らいとは違った面があります。  
(中略)

とくにエイズの場合、ホモセクシャルの人びとに多いということが重要です。ホモセクシャルというのはただでさえ異端視されるものであったために、そういう不自然な行為をする人びとが病

気になるのは当たり前のことである、という反応がアメリカでもありましたし、わが国でもそういう考え方があってはいないかと思えます。そういう人々が、善良な市民に病気を感染させるのをなんとか防ごうという意識がエイズ対策というかたちで、一種の狂乱的な、過剰反応みたいなものになっていったのではないかと思います<sup>(21)</sup>。

ここでは《不自然な行為をする人びとが病気になるのは当たり前のことである》という社会の反応の有無が、二つの《病い》に対する差別の《違った面》として挙げられている。しかし、ハンセン病の歴史を思い起こせば、これはむしろ二つの差別の共通点として捉えられるべきものではないのか。かつてハンセン病が《業病》と呼ばれていたことは、当時の人々が「前世に悪いことをした人々が病気になるのは当たり前のことである」と考えていたことの証左にほかならない。にもかかわらず先のような発言が出たのは、前世に悪いことをするという因とハンセン病に罹患するという果の関係が年月の経過に伴って崩壊したからだ。つまり、業にまつわる因果応報思想は効力を持たなくなつたが、セックスにまつわる因果応報思想はまだ効力を發揮していたというのが、ライト版執筆当時の状況であった。それゆえ、ライト版はハンセン病への差別は躲せても同性愛への差別は躲せなかったであろう。

ならば、「身毒丸」はポリテイカル・コレクトネスの観点から上演すべきではない作品なのだろうか。この問いに答えるには「身毒丸」の上演時の演出や受容までも詳細に分析する必要があるので、具体的な

回答は次稿に回したい。(論者は、文字の上の表象だった《病い》が俳優の身体に載せて表現されるときに《病い》の意味はさらに読みかえられると見ている。)

以上、《病い》表象作品としての「身毒丸」の意義を論じてきた。COVID-19が猛威をふるう現在、我々は《病い》と差別に無関係ではられない。「なぜ私(彼/彼女)ではなく彼/彼女(私)が《病い》に罹ったのか」という問いの答えを「偶然」以上の因果に結びつけ続けるかぎり、差別を生み出す構造は隠されてしまう。差別的な語彙を当たり障りのなさそうな語彙に書きかえるだけでは、真にテキストを読みかえることはできない。なぜAの語彙をBの語彙で書きかえられると思つたのか——構造を撃つにはそうした問いを立てねばならないということをも、「身毒丸」の生成とアダプテーションは物語っている。

## 注

(1) 成立年代不明。伝本に佐渡七太夫正本『せつきやうしんとく丸』(一六四八年(正保五年)刊、京二条通九兵衛版)、七太夫正本『しんとく丸』(一六八一年〜一六八八年(天和〜貞享)ごろ刊、うるこがたや孫兵衛版)がある(参照:室木弥太郎校註『新潮日本古典集成 説経集』新潮社、一九七七年一月)。**【梗概】**昔、河内の高安に住む信吉長者が神仏に子宝を祈つたところ玉のよう美しい男の子(しんとく丸)が生まれた。しんとく丸が九歳になったとき、父が神仏をないがしろにしたためにしんとく丸の母親が死んでしまう。後妻にきた女は子どもを産み、自分の子を

嫡子とするためにしんとく丸を呪い殺そうとする。呪われたしんとく丸は癪病に罹り失明する。病人になったしんとく丸は父に天王寺へ捨てられてしまった。しんとく丸のよろよろした姿を見て、人々は彼を「弱法師」とあだ名する。そのころ、しんとく丸の婚約者である乙姫が行方不明のしんとく丸を訪ねまわっていた。乙姫が神に頼むと身を簍したしんとく丸が現れる。乙姫はしんとく丸の病平癒を祈願する。すると、しんとく丸の病はきれいに治った。呪いの因果が跳ね返って今度は父が盲目になる。しかし、しんとく丸の赦しによってこの失明はすぐに治った。心を改めた父はすべての原因である後妻と弟を殺すよう命じ、しんとく丸は乙姫と結ばれて、物語は大団円を迎える。

(2) オリジナル版「身毒丸」執筆時に寺山と岸田がそれぞれの程度の割合で執筆を担当したのかを正確に示す資料は管見の限り見当たらなかった。岸田が「『身毒丸』のこと」(『新装版岸田理生戯曲集「身毒丸」「草迷宮」』劇書房、二〇〇二年一月)で執筆を《共同作業》(p.143)だったと述べていることから、岸田の意見も少なからず反映されたと推察される。一方、「身毒丸」の初刊時の著者名は寺山の単著の扱いになっている。また、「作品ノート 身毒丸」(『寺山修司の戯曲6』思潮社、一九八六年八月)でも、作者名に岸田の名前は列記されておらず、《共同台本・岸田理生》(p.351)と別個に記載されている。オリジナル版「身毒丸」の初演時に寺山と共同演出を務めたJ・A・シーザーは、インタビュー(いまいこういち(取材・文)「幻の名作と言われた寺山修司『身毒丸』、直系」

の万有引力版を再演、演出J・A・シーザー&ヒロイン蜂谷眞未に聞く」エンタメ特化型情報メディア SPICE、二〇一七年三月十六日、<https://spice.eplus.jp/articles/112455> 最終閲覧日：二〇二〇年十二月十日)で同作品を《寺山さんの『身毒丸』》や《寺山流の魅力ある『身毒丸』》と呼び、制作は寺山の一存に依っていたという姿勢で回答している。本稿では寺山が「身毒丸」の初刊時に岸田の名前を列記しなかった点を重く捉えて、ストーリーの展開や台詞に使う語句の最終決定権は寺山にあった(寺山が文責を負う)ものとして論を展開する。

(3) 岸田理生「『身毒丸』のこと」(同前) p.143

(4) 岸田理生「『身毒丸』のこと」(同前) p.144

(5) 守安敏久「蜷川幸雄演出『血は立ったまま眠っている』(Bunkamuraシアターコクーン)」(『寺山修司研究4』国際寺山修司学会、二〇一一年一月) p.213

(6) 一例に、岡田敦「『身毒丸』考——ジャパニーズ・エディプスの行方」(『椋山女学院大学研究論集 人文科学篇』三十六、二〇〇五年三月)、森岡稔「戯曲『身毒丸』における「近親性愛」と「人間愛」——ユング心理学の「結合の神秘」に照らして——」(『寺山修司研究8』国際寺山修司学会、二〇一五年四月)がある。

(7) 同論文では、寺山の「身毒丸」には説経「しんとく丸」、「あいこの若」、「おぐり」、「山椒大夫」が取り入れられていると述べられているが、根拠は示されていない。

(8) 寺山修司「作品ノート 身毒丸」(同前) p.350

- (9) 寺山修司「作品ノート 身毒丸」(同前) p. 350-351
- (10) 『折口信夫全集 第十七巻』中央公論社、一九七三年九月、p. 515
- (11) 『折口信夫全集 第十七巻』(同前) p. 515
- (12) 説経「しんとく丸」の類話には膨大な数がある。代表的なもののは謡曲「弱法師」である。また、先行研究で岸が挙げていた「あいごの若」や「撰州合邦辻」も説経「しんとく丸」の影響を直接受けている。ただし、どこまでを類話とするかという線引きは研究者によって異なっているためすべての類話を挙げることはほとんど困難と言える。かくも膨大な類話が誕生した要因の一つは、説経「しんとく丸」や謡曲「弱法師」のさらに祖となった伝承があることが考えられる。『日本伝奇伝説大事典』(角川書店、一九八六年十月)の「俊徳丸」の項(項目執筆者・坂口弘之、p. 457)によると、謡曲「弱法師」の成立以前に俊徳丸(しんとく丸)／弱法師と名づけられた人物を主人公とする伝承が存在したと考えられている(伝承は現存していない)。伝承の原拠は『今昔物語集』巻四第四「拘拏羅太子、扶目依法力得眼語(まなこをくじりほうりきによりてまなこをえたること)」に求められるともいわれるが、真偽は不明。本稿では説経や謡曲の祖とされるこの伝承を指して「俊徳丸伝説」の語を用いる。
- (13) 山本俊一『増補 日本らい史』(同前) p. 318
- (14) 寺山修司「説教節の主題による見世物オペラ 身毒丸」(『寺山修司の戯曲9』同前) p. 39-41
- (15) 岸田理生「身毒丸」(『新装版 岸田理生戯曲集「身毒丸」「草迷宮」』同前) p. 59-60

- (16) 図1、2の出典は『身毒丸 ファイナル』DVD、ホリプロ、二〇〇二年。『身毒丸 ファイナル』の初演は二〇〇二年一月二十六日〜二月三日(於：彩の国さいたま芸術劇場、演出：蜷川幸雄 主演：藤原竜也／白石加代子)であるが、収録日についてはDVDに記載がなかったため不明。
- (17) 黒岩裕市『ゲイの可視化を読む 現代文学に描かれる〈性の多様性〉?』(同前) p. 39
- (18) 黒岩裕市『ゲイの可視化を読む 現代文学に描かれる〈性の多様性〉?』(同前) p. 42
- (19) 大谷藤郎『現代のスティグマ ハンセン病・精神病・エイズ・難病の艱難』(同前) p. v-vi
- (20) 木村功『病の言語表象』(同前) p. 108-109
- (21) 山田卓生「差別の社会的背景」(『エイズに学ぶ 性感感染症対策への対案』日本評論社、一九九一年九月) p. 120-121

\*引用文中の傍線、略はすべて論者による。

\*本稿には、現在の用語基準に照らして不適切な表現がみとめられます。これらの表現は本稿が対象とする作品の表現および作品執筆当時の時代・文化背景に基づいたものであるため、分析のためには必要な表現であると判断しました。論者個人の価値観を反映したものではありません。ご了承ください。

(やぶき あやの、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学)